



田村専之助著

中国気象学史研究 上・中巻

中国気象学史研究刊行会、

(上) 1976, A 5 版, 811頁, 10,000円

(中) 1973, A 5 版, 553頁, 8,000円

この本はユニークな気象学書であり、有益な知識が豊富に記され、この方面の研究者に大きく役立つものと思われるが、出版形態が特殊のせいか市販のルートがせまく、また高価な大冊の故もあって、気象関係者の目に触れる機会が少ないと思われるので、広く気象学会員の方々に紹介しておきたい。

著者は、昭和10年早稲田大学の史学科を卒業、朝鮮の気象学史の研究により学位を興えられ、その後中国気象学史の研究に孜々として献身、健康上の困難とたたかいつつこの膨大な著作を完成、その間数多くのこの方面の研究を発表しておられる篤学の士である。評者は田村博士のことは岡田先生から伺っていたが、手紙の往復だけで面接の機会を持たず、ただ静岡県三島の地に研究に専念される姿を想像するのみである。今日では一般に科学研究は、人文・社会科学と自然科学との双方に関係する場合が多く、そのことはまた、従来両者があまりに別々に離れていたことに対する反省にもなっている。今日この著書を見るときそのことが改めて感ぜられ、気象学専攻の者として人文・社会科学との一層の協力を思うとともに、著者が「まえがき」で述べているように、第1に本書の下巻（気象現象論・気象観測・気象予察・及び中国人と気候気象・気象災害の史的研究等）が近く刊行されるよう、そして第2に、現在進行中の日本気象学史が完成されることを願ってやまない。

さて、この本の特徴は、中国の気象学史を、易・老子・莊子……などの古典から、王夫之のような明末清初の哲学者にいたるまでの著作や、農政全書・天工開物などの農書や技術書の中の自然観（宇宙観・物質観・生命観・物理学現象観）、技術観、気象観を詳細に分析していることである。上巻においては、科学の成立、自然観の展望、数量観・思考方式・余裕と自由、中国農業と

水、森林・湖沼と気候・気象、政治・経済・法律と気候・気象、産業気象などの章がある。中巻は気候・気象観概論の一章からなるが、この章は、歴史における中国人の気候・季節・気象観の概観、中国人の自然科学的認識の回顧、天文と気象、天文学的気候観、地理学的気候観、季節観、天気の法則の各節から成り立っている。そして、歴史における中国人の気候・季節・気象観の概観の節では、易、老子、莊子、列子、墨子、韓非子、管子、孔子、孟子、荀子、呂氏春秋、淮南子、董仲舒、劉向・劉歆および京房学派、礼記、緯書類、論衡、抱朴子、朱熹、禪宗（鎮州臨濟惠照禪師語録、弘果圓悟禪師碧巖録）、王夫子の気候観や季節観が分析されている。

中国人は古くから季節を天文によって知る技術を持っており、周辺の異民族が曆を持っていないことに関心を示している。たとえば魏志・卷30・東夷伝では倭人（日本人）は、「魏略日、其俗不和正歳四時 但計春耕秋收為年紀」と記されている。同様に突厥（トルコ系遊牧民）は「不知年曆 唯以草青為記」であり、吐蕃（チベット族）も「不知節候 以麦熟為歳」である。しかし、中国人は科学的に四季を認識した一方、「四季という自然現象に人間の感情・道徳その他をあて、さらに同音の文字への比定を試み、論理的に全く別種類の事項を、観念連合だけを仲介にして、ほしのままに思惟を展開させた」。そして「秋は観念的に西・白・礼・義・收成などに結びつけられ、また、刑・嚴・撃・肅とされ、秋の日は凄日ともいわれた」と、この本は述べている。上巻の「気象と刑法」の節では、異常気象が起こると刑罰を減じた事例がたくさん集められている。匹婦匹夫がその所を得ないと旱魃や低温が起こる、という記事もある。こういう考え方が中国にあったことは、評者はこの本ではじめて知った。異常気象時代といわれる現代は、この考え方からいえば、どうということになるのかな、と読んでいながら、ふと思ったりした。

著者の史観は立場の明確な独特のもので、これに対しては賛成者もそうでない者もあると思われるが、そうした立場は別として、資料としても価値の高い本と考えられる。本年7月刊行され、上巻は811ページで定価10,000円、中巻は553ページで定価8000円、発行所は著者の住所と同じ三島市光ヶ丘3-26-2の中国気象学史研究刊行会であるが、東京の丸善と一誠堂で購入できる。

(和達清夫、倉嶋 厚)